透析医のひとりごと

「夢と希望をもらった出産」 ―― 鈴木恵子

透析療法を受けている女性にとって妊娠・出産は大きな夢であり希望です．しかし同時に命懸けの大事業でもあります．T 君が高校に入学したとの便りで，私は当時を思い出して胸が熱くなるのを覚えたのでした．

昭和 59 年 9 月，開院したばかりの私のクリニックに真剣なまなざしの彼女の姿がありました．「私はどうしても子供が欲しい，今の病院の先生はそんなばかなことは考えるな，自分の命を大切にしなさいと，まったく取り合ってもらえません．先生なら女性だから私の気持ちがわかってもらえると思ってきました．転院させてください」 私は「透析療法はどんどん進歩しているのでそれも夢ではない時代がきっと来ますよ」と彼女の転院をうけいれました．しかし，文献を調べてみると出産の報告はきわめて少なく，妊娠さえも困難，また透析で使用するヘパリンの影響で流産が多いとのことでした．また，彼女は血液型が Rh マイナス，2 度の流産，血液型不適合妊娠も危惧されました．それでも私は妊娠したらその時に考えればよいとのんきに構えることにしました．

平成 2 年 7 月 6 日，妊娠 10 週間と診断されました．私は早速，鳥取大学，島根医科大学にも彼女の出産をお願いしました．しかし経験がないという理由であっさりと断られてしまいました．

そこで鳥取大学の先輩である東京女子医科大学の佐中孜先生に相談，神戸の甲南病院の内藤秀宗先生を紹介していただきました．また入院までの治療方針は透析患者の出産例のご経験のある信楽園病院の鈴木正司先生，荻原忠久先生にご教示頂きました．平澤由平先生からも励ましの伝言をいただき心強く思いました．

8 月 10 日いよいよ甲南病院に入院することになりました．大事をとっての早目の入院でした．彼女のために個室を準備してくださいました．入院後の透析は週 4 回の無ヘパリン透析（EVAL 膜），貧血に対し（その前年に保険適応になった）エリスロポエチンを投与，全身状態の改善を図られました．

12 月 19 日お昼前に甲南病院の宮崎哲夫先生より「帝王切開にて男の子が生まれました．母児ともにお元気です」とのお電話をいただきました．妊娠 34 週，赤ちゃんの体重は 1,652 g でしたが大きな産声だったそうです．

翌年 2 月の神戸新聞に彼女の記事が赤ちゃんを抱いた写真とともに掲載されました．母となった喜びにみちた笑顔がそこにありました．

ご家族と遠く離れ 6 カ月間の入院生活でしたが，ご本人のがんばりはもとより，甲南病院の先生方をはじめスタッフのみなさん，親身になって応援してくださった全国の先生方のおかげで新しい命が誕生することができました．

新聞を読んで，出産を希望する透析患者さんより彼女に相談の手紙がよせられたそうです．彼女の勇気が透析患者さんに夢と希望を与えました．その後，ご家族の協力のもとに透析通院と育児，家事を見事に両立され，お子さんはすくすくと成長，現在，高校2年生です．明るく元気なスポーツマンだそうです．「この子のために元気で長生きしたい」と彼女はいつも言っておられます．クリニックの行事には必ずお子さんを連れて参加してくださいました．そのかわいい笑顔に患者さんもスタッフも，心が和んだものでした．

私の透析医療33年余の関わりのなかでたくさんの感動や喜びを患者様から頂きましたが，これは，今も私の心を癒してくれる大切な想い出です．

おおつかクリニック